

| | |
|----------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 研究課題名 | 【演題番号 03】 食物アレルギーのアウトグローにおける抗原特異的 IgD の役割 |
| フリガナ | イトウ ナオヒロ |
| 代表者名 | 伊藤 尚弘 |
| 所属機関（機関名） （役職名） | 福井大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター 特命助教 |
| 本助成金による発表 論文，学会発表 | 1. The dual aspects of IgD in the development of tolerance and the pathogenesis of allergic diseases. <u>Itoh N</u> , Ohshima Y. Allergol Int. 2023;72:227-233. |

研究結果要約

【背景】食物アレルギー患者数は年々増加しているが、有効な治療法がなく、原因食物の除去が基本である。しかし、誤食によるアナフィラキシーのリスクがあり、その対応には十分に注意を払う必要がある。治療を目指して、経口免疫療法が研究段階的に行われているが、その効果は不十分で、更には好酸球性消化管疾患の合併の可能性もある。

【目的・方法】本研究は食物アレルギーの耐性獲得の誘導による食物アレルギーの治療、好酸球性消化管疾患の発生機序の解明を目的として行う。具体的には、近年食物アレルギーとの関連が明らかとなっている抗原特異的 IgD を検討することで、抗原特異的 IgD がどのように病態に関わっているかを明らかにする。

【結果】マウスでは、好酸球性消化管疾患を誘導した経皮感作食物アレルギーモデルマウスが抗原特異的 IgD は増加していない一方で、免疫療法モデルマウスでは増加したことを明らかにした。ヒトでは、当初予定していた経口免疫療法を行っている検体数が十分収集できず、横断研究を行い、食物アレルギーの重症度に応じて抗原特異的 IgD が増加傾向にあることを明らかにした。

【今後の予定】今後は、マウスでは免疫グロブリンの再現性を確認すると共に、サイトカインや腸管組織の解析を追加で行う。ヒトでは、引き続き経口免疫療法の検体を収集する予定である。データが十分揃った時点で英文誌に投稿するとともに国内外の学会で発表する。